

# 北海道 みなとまち紀行

室蘭編②

第 14 号

## ■室蘭編②

「室蘭編①」では今回の徒歩旅の前半、室蘭駅からフェリーふ頭を経由して中央ふ頭までのことを書きましたが、徒歩旅後半では港を少し離れて街中を巡ってきましたので、「室蘭編②」ではその時の様子を書きたいと思います。

### 【室蘭の歴史を実感～旧室蘭駅周辺エリア】

港を離れてまず向かったのが「旧室蘭駅舎」です（地図①）。「室蘭編①」でも書きましたが、室蘭駅は平成 9 年（1997）に現在の場所に新築移転されています。「旧室蘭駅舎」はそれまでの役割は終了しましたが、建物としてはまだまだ現役を終えることなく、観光案内窓口や室蘭駅記念品展示スペース等として活用されています。またその建物は道内の駅舎の中で最古の木造建築物で、寄せ棟造りなど明治期の洋風建築特有の様式で造られ、国の有形文化財にも登録されるなど、その建物自体が観光拠点にもなっているのです。私は観光案内窓口で観光情報を入手するとともに、その貴重な建物を見るために「旧室蘭駅舎」に向かうことにしました。



明治期の面影を残す「旧室蘭駅舎」（奥は蒸気機関車 D51）

入館し観光パンフレット等を探していると、奥から聴こえてきたのがピアノの音色です。曲はショパンのノクターン第 2 番



街ピアノの優雅な曲調が旧駅舎の雰囲気ベストマッチ

変ホ長調。置いてある街ピアノから優雅な曲が流れる風景に、なぜか室蘭の歴史の深さを感じてしまいました。

「旧室蘭駅舎」を出ると、道路を渡って直ぐのところにある「日本一の坂」に行きました（地図②）。実はこの小路の坂にこのような名前が付けられたのには面白い由来があります。この坂の途中にこの坂についての案内板があり、それによると明治 36 年（1903）に先ほど立ち寄った「旧室蘭駅舎」付近に新しい駅舎が移ってきて、そこと高台にあった前編でも書いた札幌本道を結ぶ生活道路として坂がつけられたそうです。そしてその上り口に「福井庵日本一」という蕎麦屋があり、それがこの坂の名前の由来になったとのこと。でもそれだけでは



驚きの逸話が残る「日本一の坂」



「室蘭八幡宮」の深い木立の間から見える室蘭港

坂の名として残るまでにはならないと思われましたが、実はそこに逸話がありました。なぜか同じ坂の多いみなとまち・小樽市の広報誌(広報おたる平成18年4月号)に掲載されていた「おたる坂まち散歩」によると、この蕎麦屋の店主は大沢運次郎<sup>うんじろう</sup>とって良い腕を持っており、当時、この店は大繁盛していたようです。しかしながら運次郎は根っからの賭博好きで、なんと殺人容疑で小樽から逃げてきたお尋ね者という別の顔があったのです。あるとき夫婦喧嘩の最中に運次郎の女房が思わず「人殺し」と口走った時、別件で店に頻繁<sup>ひんぱん</sup>に出入りしていた刑事にばれたと早合点した運次郎がピストルで自殺してしまった、との巷説<sup>こうせつ</sup>が伝えられているようです。どこまでが事実なのかは判然としませんが、明治43年(1910)頃<sup>ころ</sup>に開店したと伝わるこの蕎麦屋の繁盛ぶりからも、明治44年(1911)に完成した石炭積出高架棧橋(詳しくは「室蘭編①」をご覧ください)から容易に想像される当時の港の発展とともに賑やかさを増す室蘭に魅力を感じた人々が日本全国から押し寄せてきた状況が思い浮かびます。

「日本一の坂」を登りきり、旧札幌本道を左に曲がって少し行くと「室蘭八幡宮」<sup>はちまんぐう</sup>に続く階段が山手にありました(地図③)。長い階段を上っていくと、修理中の本殿が見えてきました。室蘭の観光情報サイト「おっと!むろらん」によると、明治7年(1874)に漂着したクジラを売ったお金を社殿造営費用にしたことから「鯨八幡」の愛称で呼ばれていたそうです。ホエールウォッチングが盛んで、市

のマスコットも「くじらん」という室蘭の神社ならではの話です。そのように海と深い由縁を持つ「室蘭八幡宮」は、じっと港を見守っているようでした。

### 【中央町商店街エリア】

「室蘭八幡宮」の境内から下りてきて、室蘭の盛況の歴史が残る中央町商店街に向かいました。すると早速、室蘭のソウルフードのひとつ、カレーラーメンの総本山「味の大王・室蘭本店」が見えてきました。でも、残念ながらこの日は定休日。以前食べたカレーラーメンをもう一度味わいたかったですが、仕方ありません。今日はもう一つのソウルフードに賭けることにしました。

気を取り直してかつての札幌本道沿いの通りを進んでいきました。シャッターを下ろしたままの店舗も目につき、かつての商店街の盛況に思いを寄せると一抹<sup>いちまつ</sup>の寂しさはありましたが、歩道の上には雨風を防ぐ屋根があり、またところどころにベンチも置いてあり、優しさに溢れた商店街だなぁ、と感じました。

商店街を歩く中で特に目についたのが、蔦<sup>つた</sup>の這う壁<sup>は</sup>の多さです。決して空き家だから、という訳で



徒歩旅の目を楽しませてくれた紅葉の蔦壁



沖合人工島「Mランド」



街中近くでこんな絶景を見ることが出来る～海の方こうに見えるのが渡島半島

はなさそうです。そういえば、「日本一の坂」の土留壁にも蔦が這っていました。室蘭と蔦の関係は分かりませんが、その後の徒歩旅の最中も紅葉した蔦が這う建物についつい目が行ってしまいました。また、ひとつの出会いもありました。商店街を歩いていると20歳前後と思われる若い外国人男性二人が近づいてきて、「室蘭では何を食べたら良いでしょうか？」と尋ねてきました。胸に何かリボンのようなものを付けていたので、クルーズ船の乗客（詳しくは「室蘭編①」をご覧ください）のようでした。実は私もカレーラーメンを逃した今、「室蘭焼き鳥」を絶対に食べにいこうと決めていたので、“室蘭焼き鳥が美味しいよ!!”と伝えると、お礼を言って立ち去ろうとしたので、咄嗟に彼らの背中に“でもチキン（鶏肉）じゃなくて、ポーク（豚肉）だからね～”と極めて大切な情報を伝授したのです。

### 【街中近くにあった絶景】

商店街を後にして、室蘭市役所のそばを歩く道は、周辺地形の中で一番標高が低そうな感じですが、ここもおそらくは砂洲が造った土地なのでしょう（「室蘭編①」参照）。まっすぐ進んで「追直漁港」に行くことも考えましたが、陽もだいぶん傾いてきたので、右に曲がって高台に上って外海を見えることにしました。立派な庭を蔦の絡まるブロック塀で囲った家々が建つ坂道をしばらく歩いていくと「電信浜」という看板が見えてきて、そこに絶景が待っていました（地図④）。断崖の下にはきれいな弧の字型の砂浜があり、追直漁港の沖合

人工島「Mランド」が浮かぶ海の方こう側には駒ヶ岳をピークに渡島半島の稜線が薄いピンク色の空を背景に際立っていました。街からこんなに近くにこのような素晴らしい景色が見られることは全く想像しておらず、本当に感動の出会いでした。

### 【室蘭発の文学にヒタル】

そろそろ陽も落ちようとしていて、気温も下がってきました。18時26分には室蘭駅から「特急すずらん」に乗って札幌に帰るので、室蘭駅の方角に戻りながら、駅前にある「港の文学館」に行くことにしました（地図⑤）。

アールヌーヴォー調の窓が特徴的な「港の文学館」に一歩入ると、そこには明るさ控えめの落ち着いた雰囲気漂わせる展示室がありました。その2階には展示室内を眺めながらお茶が飲める喫茶スペースもあるようでした。

展示室には室蘭ゆかりの作家に関する略年譜や貴重な資料等が展示してあり、多くの文学賞等の受賞作家が室蘭から輩出されていることを知りました。その中で八木義徳（第19回上半期芥川受賞



「港の文学館」の内観～許可をいただき撮影した一枚

作「劉<sup>りゅうかんふう</sup>廣福」)、三浦清宏<sup>きよひろ</sup>(第98回下半期芥川賞受賞作「長男の出家」)、長嶋有<sup>ゆ</sup>(第126回下半期芥川賞受賞作「猛スピードで母は」)の3名が直木賞ではなく純文学に与えられる芥川賞を受賞していることは、なんとなく室蘭らしいなあ、と感じました(あくまでも個人的な感想です)。

またこの文学館に来て、港で出会った「海に生きる人々」と刻まれた石碑の文字が、室蘭港を舞台に石炭貨物船で働く労働者を主人公として葉山嘉樹<sup>はやまよしき</sup>の書いた小説のタイトルであることを知りました(経緯については「室蘭編①」をご覧ください)。やはり室蘭文学も室蘭港と切っても切れない深いつながりがあるのですね。

### 【徒歩旅もいよいよクライマックスへ】

「港の文学館」で時間も忘れて展示物を見てみると、あっという間に閉館時間の17時が近づいてきて、気がつけば今回の室蘭滞在も残り1時間ちょっと。それでは徒歩旅の締め「室蘭やきとり」を食しに行きましょう。

室蘭駅の近くにも「室蘭やきとり」の名店がいくつかありますが、昭和レトロな赤ちょうちんに誘われ、この日は「焼鳥 吉田屋」にお邪魔することにしました(地図⑥)。中に入るとすでに常連さんと思われる数名がカウンターに座ってビールを飲み始めていました。私もカウンターの奥に座り、さて何を注文しようか、とふっと目線を上げると、そこに酒が置かれている棚があり、「三井の<sup>みい</sup>寿<sup>ことぶき</sup>」と

「庭のうぐいす」の文字が目飛び込んできました。まさか室蘭で九州勤務の折に親しんでいた福



この赤ちょうちんがあったら飛び込まざるを得ない(上)



絶品の「室蘭やきとり」を九州の酒とともに堪能(右)

岡の酒に出会えるとは考えてもいませんでした。どちらにするか少し迷いましたが、結局、「三井の寿」と豚精肉、鶏精肉、砂肝のタレ味を2本ずつ頼みました。焼きあがった焼き鳥の中から「室蘭やきとり」の王道、タマネギが挟まれた豚精肉に定番の洋カラシをたっぷりつけて一口食べ、「三井の寿」を流し込むと、この上もない満足感とともに今回の徒歩旅を締めくくることが出来ました。

### 【エピローグ】

「焼鳥 吉田屋」を出て、足早に室蘭駅に向かう時、ふっと振り返るとライトアップされた測量山がありました。このライトアップにかかる費用は一般からの寄付金によって賄われていて、昨年末で1万3,548日連続での点灯になったそうです。

今回の徒歩旅を通じて知ったことを振り返ると、地殻変動<sup>ちかくへんどう</sup>で出来た島<sup>しま</sup>の間に砂が堆積<sup>りくけいとう</sup>して陸繋島となり、深い入江の白鳥湾が形成され、これが天然の良港・室蘭港を生み出すことにつながりました。そしてこの港を活用して北海道の豊かな石炭資源が船で運び出されることで更なる港の整備が進み、これもきっかけに「鉄の街・室蘭」と称されるような産業立地が実現され、街を発展させることになりました。また、そのような街の急速な繁栄が文学を生み、そこで働く人々を支える「室蘭やきとり」などの食文化を生み出しました。今回の徒歩旅は、歴史が綿々とつながって現在のみなとまち・室蘭があることを改めて実感できる旅となりました。

測量山のライトアップは、みなとまち・室蘭を未来につなげていく灯に見えました。

(平澤充成 記)



みなとまち・室蘭の夜を優しく見守る測量山のライトアップ

【今回の散策ルート】



- ①旧室蘭駅舎 → ②日本一の坂 → ③室蘭八幡宮 → ④電信浜 → ⑤港の文学館 →  
 → ⑥焼鳥 吉田屋 → JR室蘭駅
- 室蘭編①の散策ルート

## 【今回の散策ミニ情報】

### 地図①

#### 旧室蘭駅舎

室蘭市海岸町 1-5-1

※明治 45 年(1912)に建設された、北海道最古の木造駅舎。国の登録有形文化財。観光案内所として開放され、貴重な鉄道用品や構内図も展示。

電話 0143-23-0102

営業時間 4月～10月 8:00～19:00

11月～3月 8:00～17:00

定休 1月1日

料金 無料

### 地図③

#### 室蘭八幡宮

室蘭市海岸町 2 丁目 9-3

電話 0144-22-2428

※漂着した鯨の代価で造営されたことから「鯨八幡」とも呼ばれるようになった神社。ソメイヨシノの桜の名所でも知られ、室蘭港も見渡せる高台にある。

### 地図⑤

#### 港の文学館

室蘭市海岸町1丁目 1-9

電話 0143-22-1501

開館時間 10:00～17:00

休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始

入館料 無料

※3人の芥川賞作家を中心に室蘭ゆかりの著名人の原稿や写真、資料を展示。カフェスペースもあり。

### 地図⑥

#### 焼鳥 吉田屋

室蘭市中央町 2 丁目 3-6

電話 0144-23-2948

営業時間 17:00～23:00

定休日 日曜日

※創業昭和 21 年(1946)、地元にも愛される「室蘭やきとり」の老舗。北海道産の肉とコクのある秘伝のタレとの相性がバッチリ。全国の地酒も各種用意。全 38 席。

### <連絡先>

NPO 法人 北海道みなとの文化振興機構

札幌市北区北 11 条西 2 丁目 2-17 セントラル札幌北ビル 5 階

e-mail アドレス mail@minatobunka-npo.info

ホームページ <https://minatobunka-npo.info>